

発行責任者
外旭川病院ホスピス 嘉藤 茂
〒010-0802
秋田市外旭川字三後田142



TEL 018-868-5511
FAX 018-868-5577
HP [www//jkk-sotohp.or.jp/sotohp/](http://www.jkk-sotohp.or.jp/sotohp/)

倫理はホスピスケアの規範

ホスピス長 嘉藤 茂

私は20年以上、ホスピスの現場に身を置いてきました。ホスピスケア提供者の振る舞いの根底には何があるべきなのか。ケアする人の判断や行動を方向づけるものは何であるべきなのか。私はこのような問いにずっと向き合ってきた気がします。これらの解答探しはケアにおける自分のありようを確認するうえでの不可欠な作業だったように思いますし、また、その作業は楽しくもありました。

患者さんに対して、人として、医師として適切な対応をすること。人としての道から外れない関わりをなし、関係を結ぶこと。すなわち、倫理がホスピスケアにおいて最重要であり、倫理こそがホスピスケアの規範ではないか。現時点での私の結論です。症状緩和は倫理実践の一部であるという認識です。倫理をめざし続けるならば、ケアの方向性が道を外れることがあっても一時的であり、倫理探求プロセスの中で軌道修正され、ケア提供者の独善が回避され、患者中心が守られ、患者の自立や責任性も尊重されると思うのです。患者が人として尊重され、敬意が払われるには、ケアする人の倫理性が成熟していかなければならないのです。

最近、こんな経験をしました。興奮して制止に従わず、事故の可能性が高くなり、安全確保を目的として身体拘束と鎮静を実施せざるを得なかった事例を紹介されたのです。鎮静状態のまま転院できないだろうか。主治医の紹介状には対応困難な状況で苦悩する現場の呻きがしみこんでいるように感じました。

どう対応すべきか迷いました。患者、家族、紹介医やその病院スタッフなどの様々な立場を想定して考察しました。今後の病状変化の予測も重要ですが、何よりも倫理的検討が欠かせない、と再認識しました。外来に医師、看護師、ソーシャルワーカーが集まりました。様々な意見が出ましたが、結論は現時点では転院を受け

るべきではない、でした。理由はふたつです。第一は、鎮静における倫理原則です。鎮静開始後には鎮静継続の妥当性について評価を繰り返さなければいけないのにされていません。第二は、転院についての患者同意の欠如です。鎮静中ですから同意の確認はできません。同意のないままに転院を強行するならば患者の尊厳を著しく傷つける、と考えました。

倫理は法律とは異なり、法は外側から強制しますが、倫理は内側から私たちに語りかけます。法に違反すれば罰せられますが、倫理に反しても法を犯さなければ処罰されません。私たちは倫理という規範を前にして後ろめたさを感じることなく臨床実践を続けたいし、そうする必要があるのでないでしょうか。

倫理問題は一人ひとりが当事者としてじっくりと取り組み考えるべきものですが、一人だけで考えると偏ってしまい、非倫理的になります。倫理をめざしているのに、倫理から離れてしまう。これを防ぐには強力なシステムが必要で、それはチームアプローチです。しっかり考える人が集まって、じっくり健全に話し合う。これが倫理実践への近道ではないかと思いつ信じています。

倫理はホスピスケアの規範、倫理は緩和ケアの土台、こんな認識を周囲と共有するための声を上げ続けたいと強く思っています。



毎日行われるチームカンファレンス

<ご遺族からのお便り> ありがとうございます

石綿 律子

先生、先日は大変お世話になりました誠に有難うございました。控室に先生と師長さんといらして下さった時に、懐かしさでペラペラしゃべり仲間に叱られました。申し訳ありません。

2015年12月に夫が亡くなり、ほぼ同時に、91歳の姑も腰の圧迫骨折で歩けなくなり、2016年8月に死去、介護～葬儀～片づけと続き、喪失感のうちに2017年の遺族会に向いました。

泣いている私を見て隣の席の60代の男性が、「ご主人を亡くされて数年、御自身も大変だと思うのですが、あなたは杉の木のように生きていくようだけど、柳の木のようにいきたほうがいい・・・。」と言って下さり改めて自分を振り返りました。

それまで2年弱、夫の演奏の映像を見ることができなかつたのですが、「これではいけない」と夫の40年間の芸能生活をDVDにする作業に入り、半年かかり今年の4月に4枚組で完成しました。約100本のビデオ・DVDをすべて見ているうちに、自分たちを振り返りいろいろ思うことができました。また、お弟子さんたちにとっても2015年10月までお稽古をしていたのに、12月に亡くなった師匠は「神かくし」にあったように感じていたと思いますが、DVDにより近くに返してあげられたような気がして安堵いたしました。

夫の遺言で「美和子（お弟子さん）を中心に小さくてもいいので梅清会を存続してほしい」という希望も美和子さんの努力とお弟子さんの支えで順調に出来ており、今年4月の発表会も無事終えて会員の皆さんと由利本荘市の夫の墓・生家・神社を訪ねることが出来、会員の方々も何かを納得されたことと思います。

先生やスタッフの皆様には、約2週間お世話になり、温かく優しい中で天に召され、夫は幸せだったと思います。私たち家族も



挨拶をされる石綿律子さん

そうです。いつか民謡を演奏させていただきたいと思っていましたがやっと実現いたしました。未熟な演奏にもかかわらず真摯にお聞きいただき心よりお礼申し上げます。スタッフの皆様にはよろしくお礼お伝えさせていただきますよう。

私も今までの自分のすべてを無駄にすることなく歩んで生きていたいと思っています。先生には早くお礼のお便りをと思いつつ今日になってしまいました。失礼をお許し下さいますよう。

7月7日の遺族会に、今年も元気に参加できることがありがたく楽しみにしております。ありがとうございます。



三味線と踊りを披露して下る浅野美和子さん



山梨での出会いと、ホスピスへの思い

2階ホスピス看護師 工藤 さゆり

9月下旬、例年よりも早く富士山初冠雪のニュースを耳にし、私が2年間過ごした山梨県を思い出した。多くの民家には庭に柿の木があり、秋には患者さんらが「我が家の柿自慢」で盛り上がる。そして何といても富士山は圧巻であり、とくに雪化粧をした山嶺は山全体の存在感を一層強くする。感謝を込めて手を合わせる人も多く、富士山は地元の人にとってまさにスピリチュアルな存在であった。

そんな山梨県で私は総合病院の呼吸器病棟に勤務した。病院には緩和ケア病棟があり、入棟するには『患者の意思』が必要だった。そのため、患者さん自身が病状を受け入れ死と向き合わなければならない。緩和ケア病棟への意思決定の過程では、一緒に泣きながら決めた人、残す妻や子供のため

に『またがん治療をしたい』と希望を捨てなかった人、『やっと楽になれる』と安堵した人など、様々な患者さんとの場面があった。癌治療から気持ちを切り替え、緩和ケア病棟を選択する苦悩を知っているからこそ、私はその患者さん達に、最期まで寄り添いたいと思った。

当院のホスピスではじめて看取りに立ち合った時、きれいな看取りだと感じ、これまでの暗いイメージはなかった。静かに、穏やかに、家族に囲まれて息を引き取る様子を見て、これまでの患者さん達にもこんな看取りをしてあげたかったと、申し訳なく思った。学び深い先生方、先輩方、ボランティアの方々に感謝し、これからも患者さんの人生に寄り添う看護を探求していきたい。



小さな野球選手

5階ホスピス看護師 松本 絵里子

子供の小学校入学を機に盛岡から秋田に戻ってきて、また外旭川病院で働いています。

以前は療養病棟で勤務していましたが、再就職してからはホスピス病棟に勤務して4年目になりました。

子供も10歳、小学4年生です。2年生から野球を始めて、早2年です。きっかけは友達に誘われて、楽天キッズのキックベースの大会に参加したことでした。友達と一緒にやりたいと、なかなか動かない私に逆ギレし、誘ってくれた友達のお母さんが協力するからと言ってくれたこともあって、今に至っています。

ですが、これが意外と大変。我が家は夫が単身赴任中で月に2回程度しか帰ってこないためあてにならず、練習もそうですが、週末は大会や練習試合があって送迎の負担が半端ではありません。

病棟での勤務なので夜勤も休日の勤務ももちろんあります。特にシーズン中は職場のスタッフに助けてもらって何とか続けられています。

野球を始めてからは、旅行にも行けず、夫が住む盛岡にも行けていません。行く場所は他校のグラウンドか野球場という野球三昧も生活です。

先日、新人戦があり7番センターで出場しました。結果は惨敗でしたが、公式戦で初ヒットを打つことが出来、満面の笑顔でガッツポーズ。まだまだ下手でミスも多いですが、これからの成長がますます楽しみです。公式戦での1勝が目標です。

ちなみに、わが子の所属チームは今話題の金農吉田輝星選手の出身チームです。



あつという間の2時間半

ホスピスボランティア 千葉 鉄子

車で自宅から秋田市迄2時間半、月に1～2回程度の活動で、グループ活動もできず、さらに冬は冬眠とボランティア活動をやっていますなんてとても言えない状態です。でも、同じ曜日仲間と顔を合わすと皆さんやさしく、ほんのりとした雰囲気になります。恐らく、患者さんも同じように感じられるのではないかと思います。

最初は、患者さんとお話しするのに、何をどう話していいかわからず天気や季節の話で終わったり、気まずい時間を早く終わらせた、自分のペースで一方向的に話をして帰ったりして、“何しに来たのヨ、本当は病氣と闘う患者さんが主人公で私ではないんだヨ”と後悔する事もありました。

人はさまざまな人生を生きてきています。この人はどういう人生を歩んできたかと思っ

ても、なかなか相手の思いをわかってあげられないのが現実です。限度のある中でほんの少しの力しかかしてあげることができません。

逆に患者さんから、自分がどう生きていたらよいか、老いをどう生きるのか、自分にも確実に起こること等、色々なことを教わりながら、仲間がいて、なにげない日々、人とのつながりのある日々、これが幸せなのかと思ひながらあつという間の2時間半。今日も秋田市に向っています。



公園でお話し相手



なぜボランティアに

看護師として臨床で働いていたのは4年4ヵ月の短い時間でしたが、若くして亡くなられた患者さんは今でも忘れられません。

気難しくなっていた大学生のOさんの部屋には看護師の足は遠のいているように思えました。30歳のKさん、お子さんが小さいので奥さんは頻繁には面会には来られませんでした。人生の終わりなのにこのような最後は寂しく残念という思いがずっとありました。

私の父はスキルス胃癌と診断されてから4ヶ月、67歳で亡くなりました。父の希望で往診して下さった先生のおかげで亡くなる前日まで自宅で過ごすことができました。父が亡くなって数ヵ月後、外旭川病院へボランティアについて問い合わせたところ、家族が亡くなってから一年間はひかえてもらっているとのこと。それから12年後、2013年から活動に参加させてもらっています。

一年に一人か二人ですが、ご自分の人生を

ホスピスボランティア 堀野 豊子

話してくださる患者さんがいらっしゃいます。お話を聞いて共通すると思ったのは皆さん一生懸命生きて充実した悔いのない人生ということ。初めて会った私に貴重な素敵な歴史をお話してくださることにありがとうございますと心でつぶやきます。

活動日は月曜午後です。お茶会の日のご家族も参加される時もあり、一服で癒されたり、福祉犬は患者さんをとびきりの笑顔にしてくれます。

患者さんの残された貴重な時間、一時でも輝くお手伝いできれば幸せです。



病室で麻雀のお相手をするボランティ



素晴らしき仲間と共に

動物福祉ボランティア協会 中央地区リーダー 菅原 園子

『心と体に潤いと安らぎを、子供たちに夢を』をテーマに、人と動物とのふれあい運動「動物福祉ボランティア協会」が発足したのは1999年、ホスピス病棟への訪問を始めたのは2003年から。ホスピス訪問は、15年になります。

活動当初は大型犬ブームでしたので、ラブラドルやゴールデンが多かったのですが、今は小型犬たちも頑張ってくれています。我家は2代目・3代目の小さいワンコになりました。ホスピスへは、月1回、第2月曜日に希望する患者さんのお部屋に伺ったり、ホールでふれあっていただいたりしています。

いつもは静寂であろうと思われる病棟に、笑い声が響き、和やかな楽しいひとときが生まれます。身体を起し、手を伸ばして撫でようとする方、かつて飼っていたワンちゃんの名前を呼んで「コタロー、来てくれたのね」「モモちゃん、会いたかったよ」と、迎えてくださる方。ご家族の方が「お父さん、笑っている!」「おばあちゃんの声が出た!」と驚き、喜んでくださり、病室は温かな空気に包まれます。

ある病室を伺った時のこと。もう殆ど意識はないのだけど…というご家族が、飼っていた同じ犬種のワンコをその方の胸に抱かせ、手を取って愛犬の名前を呼びながら、ゆっくり静かに頭から尻尾まで撫でさせた時、大粒の涙がこぼれ、こちらでも思わず泣いてしまったこともありました。

また、こんなこともありました。ラブラドルで伺った時、「もう目は全く見えませんが、今日は何とか牛になってほしい」と、ご家族に懇願され「ほら、じっちゃん、ベゴっこ、ベゴっこ来てけだよ～」と、手を犬の頭に乗せました。「ほお、来たが、来たが!」と、頭をぐりぐり撫でました。

（基本、舐めることは禁止事項ですが）犬がおじいちゃんの手をペロっと舐めた瞬間「おお!」と歓声を上げたおじいちゃんの

腰が一瞬伸び「ベゴっこ、めんけえ、めんけな!」と、満面の笑顔（大型犬の舌は、牛と感触が似ているのでしょうか）。ご家族も「じっちゃん、いがったなあ」と大喜び。病室は笑い声でいっぱいになりました。人の気持ちを和ませ癒す動物の神秘的な能力に、いつも何時も感動をもらいます。その感動が、このボランティアを20年以上続けてきた原動力の一つでもあります。また、何より同じ志を持つ仲間巡りに出会ったことも大きな財産です。

愛犬を通していろんな人が喜んでくれる、表情が豊かになっていく。犬と一緒にできないこの活動で、私の人生観も変わったような気がします。

今、定期的にホスピスに伺っているワンコは約10匹。いつも温かく迎えねぎらってくださるドクターや看護師の皆様、細やかな心遣いをしてくださるボランティアスタッフの方々に感謝申し上げ、微力ではありますが、これからも素晴らしき仲間と共に、ワンダフルなふれあいの時間を過ごせたらと願っています。



愛犬たちを歓迎して下さる患者さん



パグ、シーズー、ヨークシャーテリア、ミックス犬、ラブラドルレトリバー が勢ぞろい



「生きる力」の力

2階ホスピス看護師 皆川 雪子

出産後復帰したのがホスピスだったので、息子も、母親としての私も、ホスピスでの看護師としても今年で満11歳になりました。

息子が1年生から始めた書道は、親バカながらなかなかの腕前になり、全国で色々な賞を頂くようになりました。県内では秋田書道展という大きな展覧会が秋にあり、4年生の時に「生きる力」というお題を頂き、夏から稽古をして、三等を頂きました。この結果は本人も納得いくものでなかったし、私も「もう少しこうしておけば良かったのに」と褒めることもしませんでした。

しかし、ホスピスで病気と向き合う方に何か伝わるものがあれば…と思い、ラウンジに飾らせて頂きました。するとラウンジに来た患者さんの1人が掛け軸に目に留めて「なんて力強くて素晴らしい字だろう。なんだか力が出てきました。」次の日もその次の日もラウンジに息子の書を見に来ては「いやぁ本当に力をもらえる。ありがたい。力強いなあ。」と何度も褒めて「あなたのお子さんには素晴らしい力がありますよ。このまま伸び伸びと育てて下さい」と声を掛けて下さったのです。

書道を始めて、初めて秋田書道展に出展した2年生の時、ビギナーズラックでしょうが一等を頂き、その時に「大きな字を書く楽しさが伝わってくる素直な作品」と講評を頂き、書にはテクニックや経験だけじゃなく人に何かを伝える力があるんだと感動したのを覚えています。自分よりも大きな紙と格闘して泣きながら稽古している息子を一番近くで見守っていたのに、三等だったからと褒めもせず、

なんと情けない母親か…。

ある日、無口でありあまり笑う事のない80代の女性患者さんがラウンジで珈琲を飲んでいた時の事です。「お習字をやりたい」とボランティアさんに呟いたので、準備して筆を渡すと「生きる力」と小さく書いてくれたそうです。どんなに優しく声を掛けても心を閉ざしていたのに、息子の書がその方の心に何かを届けたのかもしれない。「もう少し生きてみたいなって思ったよ。」と笑顔で教えて下さいました。

このエピソードを息子に伝え、私の心の狭さを詫びました。子供の成長は瞬きも許さない程ですが、私も日々精進し、誰かに届く「生きる力」を身に付けていきたいです。



書を見つめるボランティアの皆様

編集後記

先日、県外の緩和ケア病棟から研修に来てくれたナースからちょっとしたうれしいお話を聞きました。彼女が当院を研修先を選んでくれた理由は、外旭川病院ホスピスのチームワークがよいという評判を聞いたからだそうです。実際には波風がまったく立たないわけではもちろんないのですが、病棟で仕事に集中させてもらっていることも事実です。ナース、介護士、MSW、ボランティアなどあらゆる立場のメンバーが、病棟チームの一員として独自性を発揮してくれるのはとても感謝なことです。チームワークの質はケアの質につながりますから、今後も研修先を選んでもらえるような病棟であり続けたいと思っています。(S.K)